

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか

接続詞に代表される「接続表現」は、文章の結束性を明示的に提示することで、文脈の理解、コミュニケーションの促進、論理展開の把握等の助けになる表現手段であり、言語教育研究においてもその重要性の認識が高まりつつあるものである。しかしながら、接続表現の定義・分類に統一見解がないことに加え、①先行研究において第二言語における誤用には母語の影響が示唆されているが、この面での研究は不十分である、②教科書の影響の調査はほとんどなされていない、③接続表現の過剰使用や誤用の傾向が、単語特有のものなのか、順接・逆接といった関係性特有のものなのか明らかになっていない、④接続表現の有無が内容理解に与える影響について研究が不十分である、という状況にあり、一層の研究が待たれている。本研究は、これらの点を明らかにしようとした点で高い意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか

本博士論文は、特に英語の *but* と *so* の2つの接続表現に焦点を当て、大学生を対象に、①テキスト内の接続表現が、日本語を母語とする英語学習者の内容理解にどのような影響を与えるか、②学習者は接続表現の意味をどのように捉えているか、③学習環境における接続表現の提示と学習者の接続表現の意味把握にはどのような関係が認められるか、を調査し、合わせて、④接続表現として使われる単語固有の傾向と、逆接・順接の関係性固有の傾向があるかについて考察している。

本博士論文は3つの研究からなり、Study 1 において *but* と *so* の意味認識の調査を行い、Study 2 において教科書及び入試問題における *but* と *so* の出現状況の調査を行い、Study 3 において *but* と *so* が内容理解に与える影響に関する調査を行っている。これらの調査を通して学習者の接続表現の理解と習得の姿を多面的に捉えようとしている点が高く評価でき、その方法は英語教育の研究において妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか

本博士論文の Study 1 では、667名の大学生を対象に、①逆接・順接及び他の関係性を表す日本語の接続表現と英語の *but* / *so* の対応関係についての認識の調査、② *but* / *so* の意味認識の調査、を行い、クラスター分析及び因子分析によって学習者の接続表現の認識の様相を明らかにしている。Study 2 では、中学校英語教科書、高等学校入試問題、大学入試問題において、*but* と *so* の「初出時期」「出現頻度」「出現時の意味の広さ」に差異が認められるかを、量的・質的両面から精査している。Study 3 では、305人の大学生対象に、①逆接関係を表す接続表現 *but* の有無によって内容理解度に差異が認められるか、②順接・因果関係を表す接続表現 *so* の有無によって、内容理解度に差異が認められるか、③学習者の英語力によって、①・②の結果に差異が認められるか、④学習者の *but* / *so* の意味認識によって①・②の結果に差異が認められるか、⑤ *but* / *so* の有無によって、和訳時にそれぞれの語が訳出される比率に差異が認められるか、また訳出の有無と内容理解度にはどのような関係があるか、を調査し、一元配置分散分析、二元配置分散

分析、クラスター分析、カイ二乗検定を用いて分析している。これらのデータ収集と分析の方法はいずれも適切なものである。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

Study 1 においては、① but の意味については英語力上位群・下位群ともに逆接と認識していること、② so の意味は広く捉える傾向があり、特に英語力下位群は上位群よりも広く捉える傾向があること、③ but の意味認識は英語母語話者と同様の傾向であること、④ so の意味認識は英語母語話者と異なるが、英語母語話者内でも意味認識は but よりも個人差が大きい傾向があること、を明らかにしている。Study 2 では、①教科書における but の初出時期及び初出時の意味は比較的一致しており、出現頻度は学年ごとに増加していく傾向にあり、接続表現ではない but の出現種類・頻度は中高で一貫して少ない傾向にあること、② so の初出時期や初出時の意味には一貫性がなく、so が順接・因果を表すという明示的な説明を受ける機会がない可能性があること、③接続表現ではない so の出現種類・頻度は一貫して多い傾向にあること、を明らかにしている。Study 3 では、① but は一定条件下 (but が逆接であると認識できている) で文章理解に影響を与えること、② so が文章理解に与える影響は、so の意味認識や英語力に関わらず小さい、あるいはほとんどないこと、③ so の影響の小ささは、文章読解時に so に着目していないことが理由である可能性があること、を明らかにしている。これらの考察と結論は妥当であり、学術的な水準に達しているものである。

また、Study 1 では多様な英語習熟度を持つ大学生 667 名を対象にデータ収集しており、Study 2 では、①教科書については、2015 年度検定済みのすべての中学校英語教科書 (計 18 冊) を対象とし、②高校入試については、2016 年度の公立高校の入試問題計 48 種の筆記及びリスニング問題を調査対象とし、③大学入試については、2009 年度～2018 年度のセンター試験の筆記及びリスニング問題を調査対象とし、いずれにおいても緻密な分析を行っている点において、それぞれの研究データの資料的価値も高いものである。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は、日本の学習者の英語接続表現の認識と習得について多面的に実証した研究であり、記述統計と推測統計、量的分析と質的分析が適切に行われ、導き出された考察と結論は妥当である。本研究は、理論的基盤、実証データの適切な分析、明確な論理展開を持つ研究であり、その結果は言語教育への示唆に富むものである。

以上のことから、本博士論文は、本研究科の趣旨に合致するものであり、博士 (教育学) の学位を授与するに値する内容を備えたものであることが認められる。